

# バーンアウト研究の 方法論的問題

奥村太一  
2014年8月30日



## 一般的な質問紙

- Maslach Burnout Inventory (MBI) (Maslach, Jackson, & Leiter, 1996)
  - Educators Survey (ES) → 我々が翻訳
  - Human Service Survey (HSS)
  - General Survey (GS) → 北岡(東口)ら
- ※ 日本版も含め、Mind Garden, Inc. が著作権を保有 (公開不可能)
- 日本版バーンアウト尺度 (久保, 1998)
  - オリジナルの教師用項目を作成

1

2

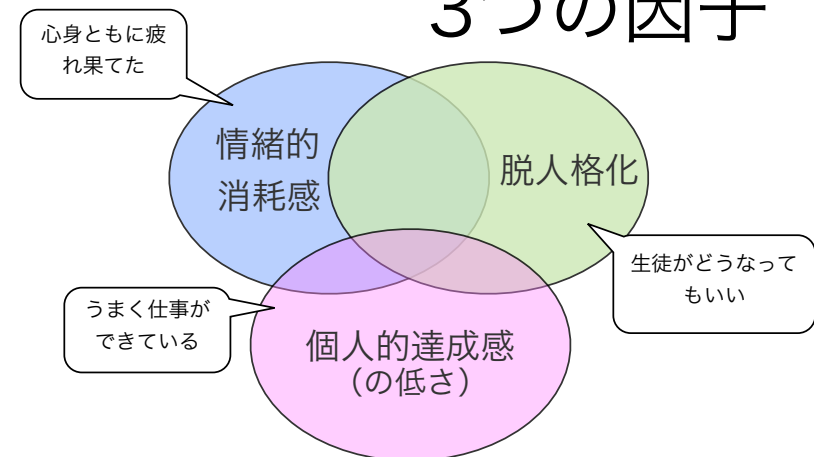
### 例

日本版バーンアウト尺度 (久保, 1998)

	あなたは、最近6ヶ月ぐらいの間に、次のようなことをどの程度経験しましたか。	いつも	しばしば	時々	まれに	ない
1	こんな仕事、もうやめたいと思うことがある。	5	4	3	2	1
2	われを忘れるほど仕事に熱中することがある。	5	4	3	2	1
3	こまごまと気づきやすることが面倒に感じることがある。	5	4	3	2	1
4	この仕事は私の性分に合っていると思うことがある。	5	4	3	2	1
5	同僚や患者の顔を見るのも嫌になることがある。	5	4	3	2	1
:	児童生徒					
16	体も気持ちも疲れ果てたと思うことがある。	5	4	3	2	1
17	われながら、仕事をうまくやり終えたと思うことがある。	5	4	3	2	1

3

### 3つの因子



本当にありのままを答えてくれるのか？

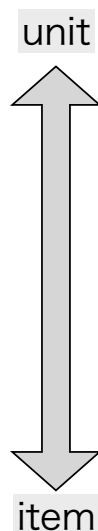
症状 → 自覚 → 報告

望ましい教師像、イラショナルビリーフ、謙遜という美德...

4

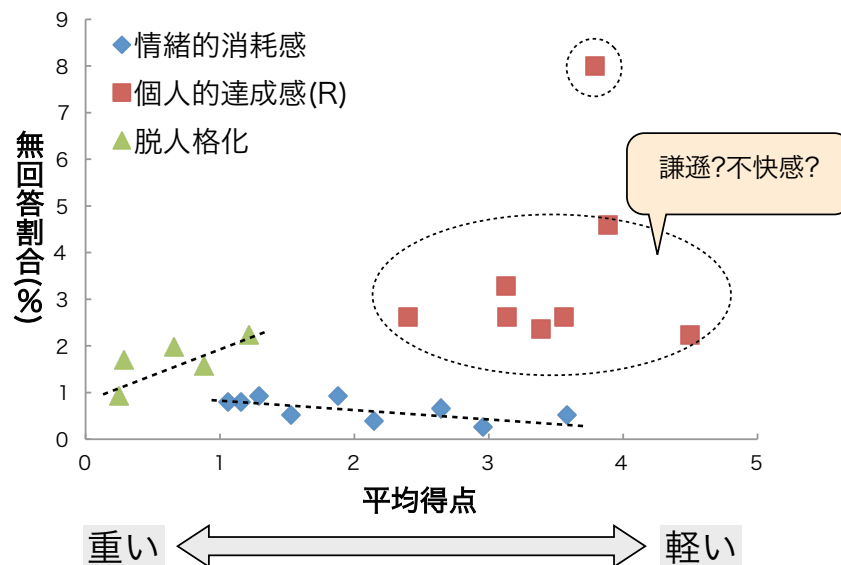
# 無回答

- 回答者の不在
- うっかりミス
- 多忙
- 調査への無関心、嫌悪感、不信感
- 回答に対する負担感
- 項目の意味内容を理解できない
- 回答できる立場にないと感じる
- 程度を評価できない
- 項目の意味内容を自分と関連づけたくない
- 自己主張に対するためらい
- ...



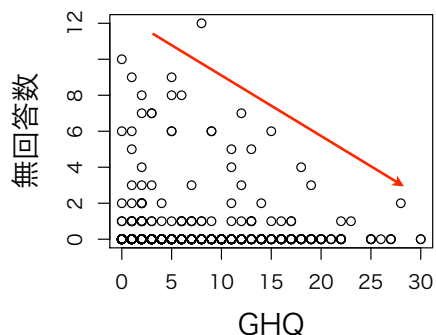
5

# 平均と無回答



6

# 無回答数と精神的健康



- ある程度健康な人に無回答が多い
- 重い症状に対応するように項目は、そう見えるだけなのかも

- 情緒的に消耗したり脱人格化を起こすということが想像できない、あるいは教師としてあるべき姿でないという信念 → 項目への不快感?
- 平均得点との相関も含め、詳細に検討すべき

7

# 研究の限界

- 研究者と回答者の信頼関係の不足
- たった1回 (多くても年に数回) のバーンアウトの自己報告を、信頼関係も構築できていない回答者の善意に頼っている
- 防衛機制、項目に対する不快感、調査への不信感...反応バイアス、無回答?
- バーンアウトの発生機序、経過、時間や場所への依存 → 詳細を明らかにできない
- 人数より質への転換が必要ではないか?

8

# EMA

- Ecological Momentary Assessment (生態学的経時的評価) (Stone & Shiffman, 1994)
- 過去の記憶に頼るのではなく、「今ここで」どう感じるかを回答
- 電子デバイスなどを用いて継続的に評価
- 大量の縦断的データ
- 症状の変化、周期的な変動、発生機序
- 協力者 (治療プログラムへの参加者) を募集、詳細に意図を説明、相応の報酬

9

# IRT

- Item Response Theory (項目反応理論)
- 各項目がどれくらい重い症状に対応しているのか、情報を整理 (項目パラメータ)
- 項目パラメータが既知であれば、異なる項目の組み合わせに回答しても比較可能
- 回答項目数が少なくてすむ (負担の軽減)
- 毎回同じ項目に答えなくてすむ
- 回答者に応じた項目を提示 (適応型テスト)

11

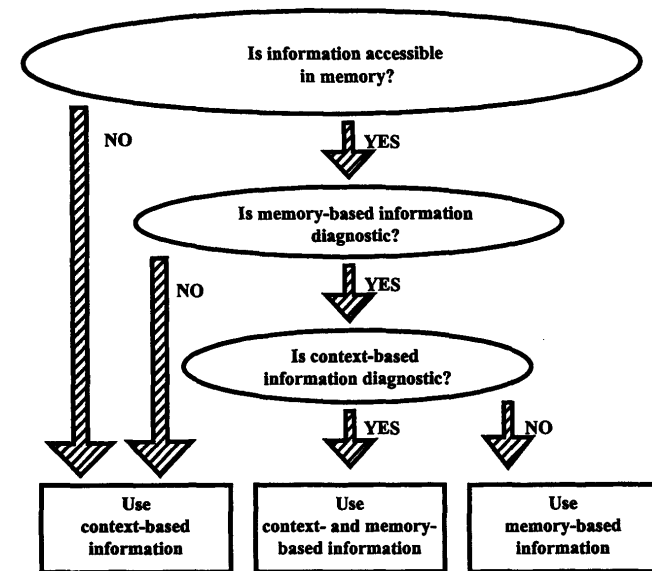


FIG. 5.1. The use of Memory and Contextual Information in Judgments. Source: Menon, Raghbir, and Schwarz (1997).

10

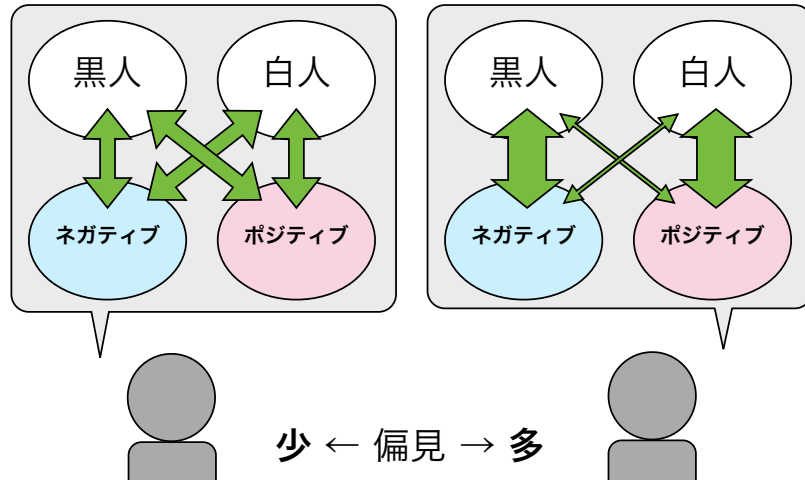
# IAT

- Implicit Association Test (潜在的連合テスト)
- 差別や偏見の程度 → 他分野への応用
- ある対象に対するポジティブ-ネガティブな感情の強さを、概念同士の連合の強さに置き換え
- PCを用いた単純な作業課題、反応時間の得点化
- 社会的望ましさによる反応バイアスを軽減
- 妥当性については批判もある

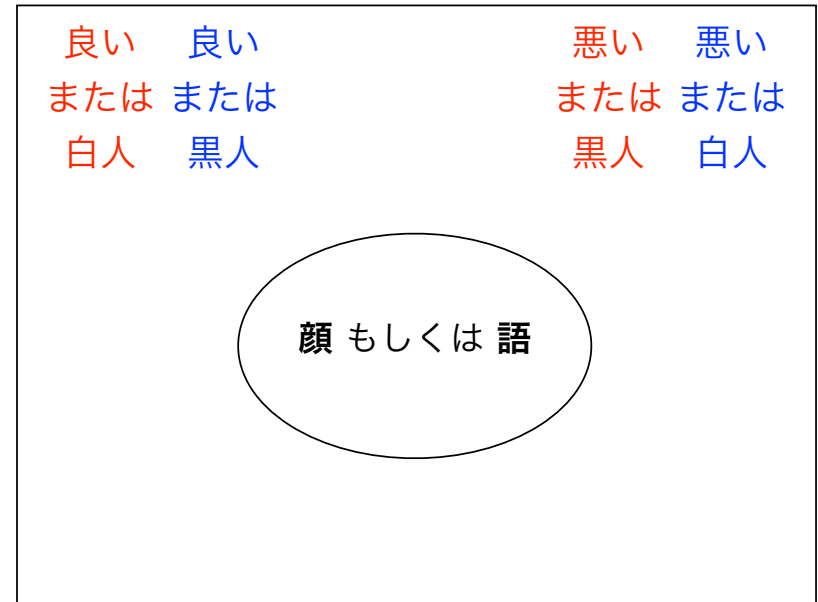
12

# 考え方

例：黒人への偏見、差別感情



13



14

- もし黒人に差別感情を抱いていると、  
「白人 - 良い」「黒人 - 悪い」の連合が  
「白人 - 悪い」「黒人 - 良い」の連合よりも強いはず
- よって、後者の連合を求める課題が、前者のに比べてすみやかに回答するのが困難になる
- 反応時間、誤答率から黒人に対する差別感情の強さを算出

15

## 参考文献

- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(6), 1464-1480.
- 久保真人 (2004). *バーンアウトの心理学* サイエンス社
- 西村昭徳・森慶輔・宮下敏恵・奥村太一・北島正人 (2013). 小学校および中学校教師におけるバーンアウトの進行プロセスに関する縦断的研究 *心理臨床学研究*, 31(5), 769-779.
- Stone, A. A., Shiffman, S., Atienza, A. A., & Nebeling, L. (2007). *The science of real-time data capture*. Oxford University Press.

16